

特集

# 『枕草子』再研究

小学校の古典学習でも親しまれている『枕草子』は、これまで数多くの実践が積み重ねられてきた教材。本特集では、この作品に新しい光を当てることを目指しました。

近年、『枕草子』の新訳を發表されたエッセイストの酒井順子さんと、『枕草子のたくらみ』の著者で研究者の山本淳子先生には、『枕草子』を巡る文章を寄せていただきました。それと合わせて、小学校を含めた四つの実践提案を通し、あらためてこの作品の魅力に迫ります。

## エッセイストの資質

エッセイスト 酒井順子

「すべてのエッセイは自慢である」と、故・井上ひさしさんがお書きになっていたのはまったくその通りで、たとえば「こんなものを食べた」「こんな人に会った」といった体験を書くことは、今風に言うなら「リア充アピール」なのです。

ハッピーな体験ばかりがエッセイの題材になるわけではありません。ハッピー尽くしでは自慢臭が強すぎて、芸にはならない。読者は執筆者のアンハッピーな体験をも望んでいるわけで、「私はこんな不幸をも面白く書くことができる」という自慢を、我々はしばしばしているのです。

エッセイ界の大先輩である清少納言は、「自慢しい」な性質であるとされています。「私はこんなに教養がある上に機転がきくから、エリート貴族からも好かれていた」といった自慢話がそこそこ。紫式部などは、清少納言のそんな性質を、激しく憎んでいました。

しかし清少納言が自慢しいであるにもかかわらず『枕草子』が千年後の今も読まれ続けているのは、そこにほどよく不幸自慢も織り交ぜられているからなのではないかと、私は思います。

たとえば「羨ましげなるもの」の段では、伏見稲荷に参詣に行った時、のろのろ歩く清少納言の横を、平気な顔で追い抜いていく中年女のこと記されます。清少納言は、暑い中で歩くのがつらいあまり、涙まで流しているのに、中年女は平然とした様子。清少納言は「あんな風になりたい……」と、情けない思いをしているのです。

はたまた、自分の元夫がどんなにつまらない男かというだめんず話、今ひとつな自分の容姿についてのブス自慢など、読者に親近感を持たせる不幸話もしばしば登場。日本随筆界の祖は、自慢と不幸自慢のバランスの取り方を、知っていました。

エッセイを書く人は、ある種の不幸運を

持っていないわけではありません。幸せいっばいの人生について書いても、「よかったです」で話は終わってしまうのですから。

その点でも清少納言は、運に恵まれていたと言えましょう。彼女にとっての最大の不幸は、自らが女房として仕えた中宮定子が、道長の娘である彰子に追い落とされるようにして、悲しく人生を終えること。最大の不幸はあえて全面に押し出すことなく、それを「書く」原動力とする。そんな清少納言はまさに、生まれながらの随筆家なのだと思えます。



1966年、東京都生まれ。エッセイスト。高校在学中より雑誌にコラムを寄稿。大学を卒業後、広告代理店勤務を経て、執筆専業に。「負け犬の遠吠え」で講談社エッセイ賞、婦人公論文芸賞を受賞。2016年、『日本文学全集』（河出書房新社）で『枕草子』の新訳を発表。著書に、『枕草子 REMIX』（新潮文庫）など。